

(はじめに：本稿を執筆しているのは3月中旬であることをご承知おき下さい)

2年。そう、新型コロナウイルス感染症(COVID-19)のパンデミックが宣言されてから流れた月日である。この間、日々の暮らしはもちろんのこと、大学における教育・研究もすっかり様変わりした。せっかくの機会なので、この2年間で感じたことを私自身の備忘録として記そうと思う。

様々なことがオンラインで実施されるようになった。当初は、講義・学生実験、学会・講演会のすべてがオンラインで実施されたが、COVID-19のまん延状況に応じ、感染に注意しながら以前(コロナ禍前)のような対面形式で実施されるようになった。また、我々がオンラインに慣れてくると、懇親会(いわゆる飲み会)などもオンラインで実施されるようになった。改めて調べてみると、ユーキャン新語・流行語大賞2020のトップテンに「オンライン〇〇」が選ばれていた(ちなみに、大賞は「3密」)。

さて、上記の教育・研究活動をオンラインで実施することの功罪のうち、特に「罪」の側面は様々な媒体で目にしてきたことから、本稿では割愛する。ここでは、あえて「功」の側面を2点ほど取り上げようと思

う。第1は、ウェビナーの普及である。学協会が主催するウェビナーでは、普段は触れる機会があまりない分野について知ることができ、非常に勉強になった。また、企業が主催するウェビナーでは実験装置の使い方や復習や論文執筆のノウハウなどを学生と一緒に学ぶことができたのは大変良かった。なお、このようなウェビナーはCOVID-19のパンデミック以前にも開催されていたと思うが、私はほとんど参加したことはなかった。第2は、研究の進め方にメリハリがついたことである。研究活動に制限が伴う状況が続いたため、学生と一緒に、それまで以上に綿密な実験計画を立てて研究を進めるように心がけた。そのおかげもあり、学生も私も自身の時間を管理する力がついたのではないかと思う。

COVID-19も3年目に突入する(した)。この2年間で経験したことを通じ、教育・研究活動における「ウィズコロナ・ポスト(アフター)コロナ」の姿が見えてきたように感じている。ある程度の我慢が必要な日々はしばらく続くだろうが、「オンライン〇〇」を活用しながら、いまできることに力を注いでいこうと思う。

(山本崇史)

カラー写真ご提供のお願い

化工誌編集委員会

本誌の目次や編集後記下に掲載するカラー写真を広く会員の皆様からのご投稿をお願いしています。ご投稿いただいた写真は編集委員会で適宜選択して使わせていただければと考えています。ご投稿の際にはごく簡単な説明をつけていただき、電子ファイルの場合には高解像度のもの(300DPI以上)をお送り下さい。

以下のような写真のご提供をお待ちしています。

1. 季節感のあふれた風景・草花・野鳥・動物の写真など
2. 化学に関する写真—カラフルな物質、化学模型、電顕写真、実験機器、化学プラントなど

送付・問合せ：101-8307 東京都千代田区神田駿河台 1-5
日本化学会 学術情報部 「化学と工業」誌担当
電話(03)3292-6165 FAX(03)3292-6319
E-mail: kakoshi@chemistry.or.jp



ミツガシワ 浅野 努